

国立国会図書館



憲政資料室の新規公開資料から
憲政資料収集活動の点描 1980年代後半～90年代を中心に
デジタルコレクションから歴史・文化を掘り起こそう
～NDLデータ利活用ワークショップ報告～
世界図書館紀行 タシケント (ウズベキスタン)

2015.11
No. 655

国立国会図書館利用案内

東京本館

所在地 〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話番号 03(3581)2331
利用案内 03(3506)3300(音声サービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
ただし、満18歳未満の方には、個別に相談に応じています。詳しくはホームページをご覧ください。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和洋の図書、和雑誌、洋雑誌(年刊誌、モノグラフシリーズの一部)、和洋の新聞、各専門室資料

サービス時間

| | | | |
|---------|---|-----------|-----------------------------------|
| 開館時間 | 月～金曜日 9:30～19:00 土曜日 9:30～17:00 ※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の開室時間は17:00までです。 | 即日複写受付 | 月～金曜日 10:00～18:00 土曜日 10:00～16:00 |
| 資料請求受付★ | 月～金曜日 9:30～18:00 土曜日 9:30～16:00 ※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の資料請求時間は16:00までです。 | 後日郵送複写受付★ | 月～金曜日 10:00～18:30 土曜日 10:00～16:30 |

★登録利用者限定のサービスです。

■見学のお申込み/国立国会図書館 利用者サービス部 サービス運営課 03(3581)2331 内線25211

関西館

所在地 〒619-0287 京都府相楽郡精華町精華台8-1-3
電話番号 0774(98)1200(音声サービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
ただし、満18歳未満の方には、個別に相談に応じています。詳しくはホームページをご覧ください。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和図書・和雑誌・新聞の一部、洋雑誌、アジア言語資料・アジア関係資料(図書、雑誌、新聞)、科学技術関係資料、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、博士論文

サービス時間

| | | | |
|---------|-------------------|------------------|-------------------|
| 開館時間 | 月～土曜日 10:00～18:00 | 即日複写受付 | 月～土曜日 10:00～17:00 |
| 資料請求受付★ | 月～土曜日 10:00～17:15 | 後日郵送複写受付★ | 月～土曜日 10:00～17:45 |
| セルフ複写受付 | 月～土曜日 10:00～17:30 | ★登録利用者限定のサービスです。 | |

■見学のお申込み/国立国会図書館 関西館 総務課 0774(98)1224 [直通]

国際子ども図書館

所在地 〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49
電話番号 03(3827)2053
利用案内 03(3827)2069(音声サービス)
ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>
利用できる人 どなたでも利用できます。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 月曜日、国民の祝日・休日(5月5日こどもの日は開館)、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
※児童書研究資料室は、システムメンテナンス等のため臨時休室することがあります。
おもな資料 国内外の児童図書・児童雑誌、児童書関連資料

サービス時間

| | | | | |
|-----------------|------------------|-------------------|-------------|-------------------|
| 開館時間 | 火～日曜日 9:30～17:00 | | | |
| 児童書研究資料室の資料請求受付 | 火～日曜日 9:30～16:30 | | | |
| 複写サービス時間 | 即日複写受付 | 火～日曜日 10:00～16:00 | 後日郵送複写受付 | 火～日曜日 10:00～16:30 |
| | 複写製品引渡し | 火～日曜日 10:30～12:00 | 13:00～16:30 | |

■見学のお申込み/国立国会図書館 国際子ども図書館 03(3827)2053 [代表]

CONTENTS

- 02 敗戦後の陸軍大臣、下村定の日記 去年の今日、おととしの今日は
今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から
- 04 憲政資料室の新規公開資料から
- 10 憲政資料収集活動の点描 1980年代後半～90年代を中心に
- 16 デジタルコレクションから歴史・文化を掘り起こそう
～NDLデータ利活用ワークショップ報告～
- 21 世界図書館紀行 タシケント（ウズベキスタン）
- 28 図書別室の資料から 第1回 かるた

31 本屋にない本
○「トンボ鉛筆100年史 The 100 year history of
Tombow Pencil」

32 館内スコープ
職員の「学び」を支えます

33 NDL NEWS
○重要文化財の指定

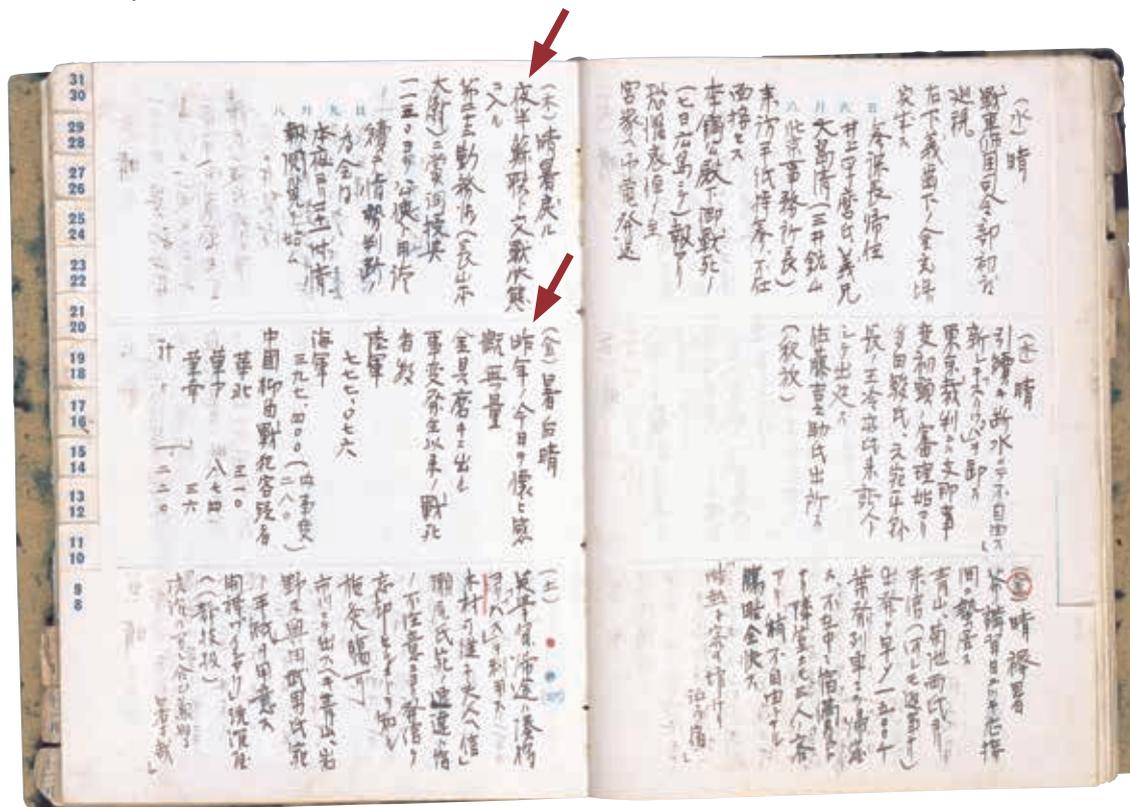
34 お知らせ
○新刊案内 国立国会図書館の編集・刊行物

国立国会図書館の蔵書から

敗戦後の陸軍大臣、下村定の日記

去年の今日、おととの今日は

眞子 ゆかり



8月9日部分（左ページ）。上から1945年、1946年、1947年。



下村定（しもむら さだむ）
 1887-1968 石川県生まれ
 1908 陸軍士官学校卒（戦後最初の首相となる東久邇宮稔彦王とは同期）
 1945 陸軍大将 北支那方面軍司令官として中国で敗戦を迎える。戦後は東久邇宮内閣・幣原内閣で陸軍大臣、陸軍省廃止時に依願免官
 1946 戦犯容疑者として巣鴨拘置所に収監（不起訴）
 1947 釈放、公職追放
 1959-1965 参議院議員（肖像：下村定関係文書（その2）資料番号 85-1 より）

ここに紹介するのは、最後の陸軍大臣を務めた下村定の1945年から1947年にかけての「3年日記帳」である。下村にとって、この3年は、激動する昭和の歴史がそのまま自身の個人史となったような時期だった。陸軍大将・陸軍大臣であった1945年、戦犯容疑で巣鴨拘置所に収監された1946年、さらに釈放はされたものの公職追放となった1947年。「3年日記帳」という形式のおかげで、この間の下村の状況の激変ぶりが一目瞭然にわかって興味深い。下村自身、日記をつけようとして、一年前のちょうどその日、「去年の今日」に思いを馳せていることがある。

たとえば8月9日の頁。1945年のその日、突如ソ連は日本に宣戦布告して当時のソ連・満洲国境に侵入、両国は戦闘状態に

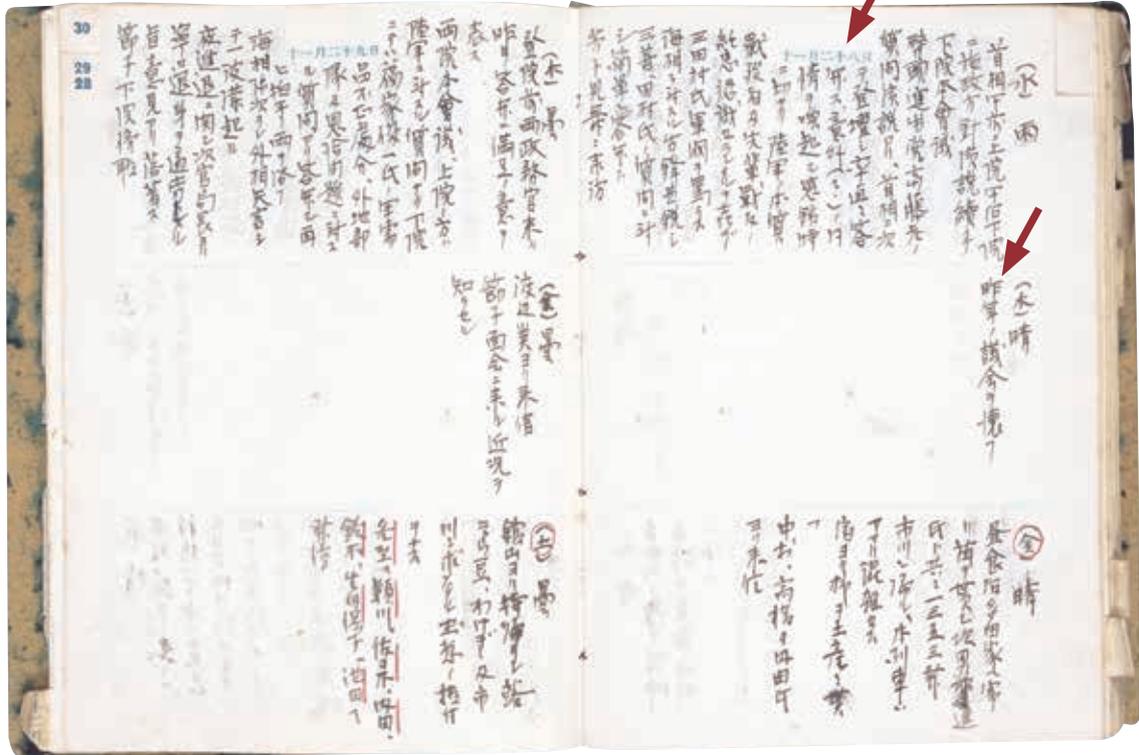
入った。そのとき北支那方面軍司令官だった下村は、この予想外の、驚天動地の事態について「夜半ソ連ト交戦状態ニ入ル」と冒頭に記している。翌1946年は巣鴨拘置所にあつて「昨年ノ今日ヲ懐ヒ感慨無量」と綴り、さらに「満洲」事変発生以来の戦死者数と中国抑留戦犯容疑者数を記す。

また11月28日の頁。1945年、陸軍大臣として衆議院本会議で、反軍演説で知られる斎藤隆夫議員から軍部の戦争責任について質され、「(略)率直ニ答弁ス。意外(?)ノ同情ヲ喚起シ感銘特ニ切ナリ」。確かに、当日の帝国議会の記録を確かめると、議場で何度も拍手が起こったことがわかる（第89回帝国議会衆議院議事速記録第2号）¹。この時傍聴していた貴族院議員の大木操²のように、「すべてが終って



下村定関係文書（その1）
資料番号 17 / 日記
憲政資料室所管

日記表紙



11月28日部分（右ページ）。

から詫びられてももう遅いのだ」³と下村の答弁の様子を醒めた目で見ている者がいたが、11月末の陸海軍省廃止が目前に迫っていたせいもあってか、議場内は下村自身も「意外(?)」と驚くほどの情緒的反応が大勢を占めたようだ(ただし、いわゆる翼賛選挙で当選した議員で構成された議会ではあったが)。翌1946年は、その「昨年ノ議会ヲ懐フ」となつかしんでいる。

だが、両日とも1947年の記述は、ワイシャツを洗濯屋に出した、柿を土産に貰った、というごく普通の生活の記録である。「おとしの今日」についてはまったく触れられていない。それゆえ、歴史を読み取ろうとこの日記の頁を繰り、一段目、二段目と順に進んで三段目の1947年の記述を読むと、なぜこんな身近の小事が書いてあ

るのかと少なからず違和感を覚える人もいるかもしれない。

しかし、日記は本来私的なものである。中国大陸でも巣鴨拘留所でも常に手元に置いたこの日記に、下村は自分の身に起こったことや思ったことを記録していたにすぎない。そこに歴史的資料としての価値があらうとなかろうと本人のあずかり知らぬことであろう。だから、その部分には目もくれないのも、あるいは、しばし、歴史と重なった人生の一時期をもつ人間の胸中に思いをいたすのも、それはこの日記を手にとった人の自由である。

(まなご ゆかり)

利用者サービス部政治史料課)

1945
この資料は、国立国会図書館平成27年度特集展示「1945一終戦の前後、何を読み、何を記したか」で展示しています。
【東京】～11/2(月)
【関西】11/13(金)～28(土)
※日・祝・第3水曜日休館。
ただし11/15(日)は開催。

1 国立国会図書館 帝国議会会議録検索システムでみることができる。http://teikokugikai-i.ndl.go.jp/
2 大木操(1891-1981)は戦前から戦後直後まで衆議院書記官長(現在の衆議院事務総長にあたる)を務め、貴族院の勅選議員となった。
3 大木操の回想録『激動の衆議院秘話 舞台裏の生き証人は語る』<請求記号 GB511-74> p. 408

憲政資料室の新規公開資料から

国立国会図書館は、幕末・維新时期から現代にいたる政治家、官僚、軍人らが所有していた個人文書（憲政資料）を所蔵しています。このたび東京本館憲政資料室で新規に公開した資料をご紹介します。

金子堅太郎関係文書（その2）

（171点 平成27年5月公開）

金子堅太郎は大日本帝国憲法の起草者として教科書にも登場する人物で、ポーツマス条約（日露講和条約）締結に際しても、当時のセオドア・ルーズベルト米大統領と個人的に親しかったことから、重要な役割を果たしたことで有名です。そのような重要人物ですが、大正12（1923）年の関東大震災で自宅が焼失し、残念ながら多くの資料が失われてしまいました。それでも、憲政資料室には日露戦争当時の資料（「金子堅太郎関係文書（その1）」）が、日本大学学術情報センターには日記などが残されています¹。

今回新たに公開した資料は、関東大震災以後の金子旧蔵の書簡群です。震災当時、金子はすでに70

歳に達しており、「うるさ型」として一目置かれてはいましたが、すでに政界の一線から退いた人でした。しかし、昭和に入り日米関係がしだいに悪化すると、逆に親米派である彼の存在が重要性を持つようになってきました。そのため本文書には、昭和戦前期の日米外交にかかわる興味深い書簡が数多く含まれています。

写真1は、昭和15（1940）年2月12日に、金子が時の総理大臣米内^{よない}光政に送った書簡です。この前月、米内は親英米派の強い期待を受けて首相に就任しました。米内に対して金子はこの書簡で、中国駐在アメリカ大使のジョンソンが、日本が唱える「東亜新秩序」とは、今後欧米人には中国の利権を一切渡さないという意味であると本国政府に報告したため、

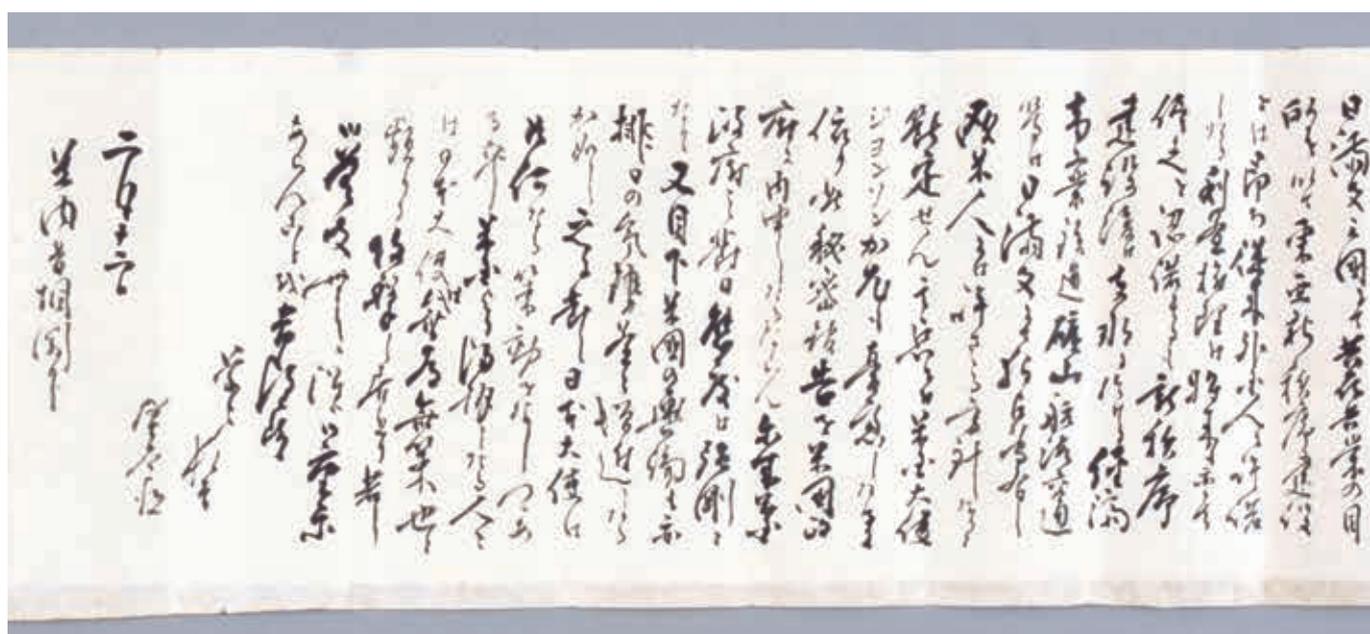


写真1 金子堅太郎書簡 米内光政宛 昭和15（1940）年2月12日付 金子堅太郎関係文書（その2）27-2



それ以来アメリカの対日世論が強硬になっており何らかの対策を立てるべきである、と述べています。この返信が、写真2の2月19日付書簡です。ここで米内は、確かにアメリカは東亜新秩序建設と自らの主張する門戸開放主義が相容れないものと考えているので、内閣はこの誤解を解くため、手近なところから懸案をひとつずつ解決して、「論より証拠」主義で進む方針であると述べています。しかし、この直後に開始されたドイツの積極的攻勢が成功し、日本国内の雰囲気は日独伊三国同盟へと一挙に傾いたため、米内内閣は「証拠」を積み重ねる間もなく倒れてしまいました。

なお、本文書には、ほかにも枢密院や皇室、特に『明治天皇紀』編纂にかかわる書簡があります。

- 1 高瀬暢彦「金子堅太郎」『近現代日本人物史料情報辞典』（吉川弘文館、2004）参照。

金子堅太郎 (1853～1942)

嘉永6（1853）年福岡生まれ。岩倉使節団の随員として渡米、そのまま留学してハーバード・ロー・スクール卒業。在学中、セオドア・ルーズベルトと面識をもつ。帰国後、伊藤博文の側近として大日本帝国憲法など重要法案の起草に関わり、農商務大臣・司法大臣を歴任、日露戦争では対米外交折衝を担当する。明治39（1906）年枢密顧問官に就任、以後は伊東巳代治とともに「憲法の番人」として歴代内閣から恐れられた。昭和17（1942）年死去。



<肖像写真の出典>

『近世名士写真 其1』 近世名士写真頒布会 1935
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3514946/75>
 国立国会図書館デジタルコレクションでご覧いただけます。

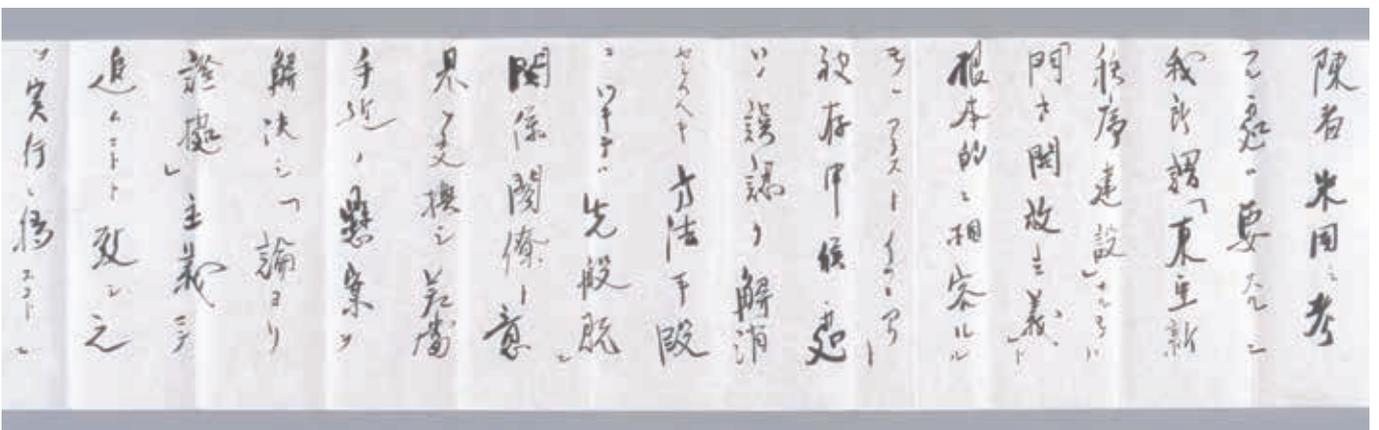


写真2 米内光政書簡 金子堅太郎宛 昭和15（1940）年2月19日付 金子堅太郎関係文書（その2）88-1 *写真1の書簡への返信

内田康哉・政関係文書

(107点 平成26年10月公開)

内田康哉は明治20(1887)年に外務省に入省以来、3度にわたり外務大臣を務めた外交官・政治家です。第一次世界大戦後のパリ講和会議、ワシントン会議など数々の外交現場を経験したことで知られ、内田康哉の関係資料は氷川町竜北歴史資料館（熊本県八代郡）に所蔵されています。憲政資料室では、同館所蔵資料を撮影したマイクロフィルムで収集し、平成25年3月より公開しています（本誌632（2013年11月）号参照）。

このたび、ご遺族より寄贈を受けた「内田康哉・政関係文書」は内容的にこれを補完するもので、内田康哉の履歴や葬儀、追悼会の資料、康哉関係の新聞記事などが収録されています。また、海外赴任中に康哉の妻・政が両親（土倉庄三郎・寿子）に宛て

た書簡、日記など、政の資料も充実しています。

政は奈良の山林地主・土倉庄三郎の次女として生まれ、同志社女学校を経て米国の名門女子大プリンマー大学を卒業、帰国して明治32（1899）年に康哉と結婚しました。語学に堪能で、外交官である康哉の清国、奥（オーストリア）、米、露などの駐割^{ちゅうきつ}に同行し、社交を助けたといわれます。文書には、あてやかなドレス姿の写真も残ります（写真3）。

また康哉がオーストリア大使・スイス特命全権公使の任にあった明治40（1907）年の両親宛書簡には「交際社会には是非仏語必要のよしニ候得は、そのうちに又けいこはじめ、練習致度もの」「独乙語も此国の言葉故、買物など致すニ是非必要故、そのうち又はじめ申さん」とあり、政の向学心を物語ります（写真4）。



写真3 写真（ドレス姿の政）
内田康哉・政関係文書84

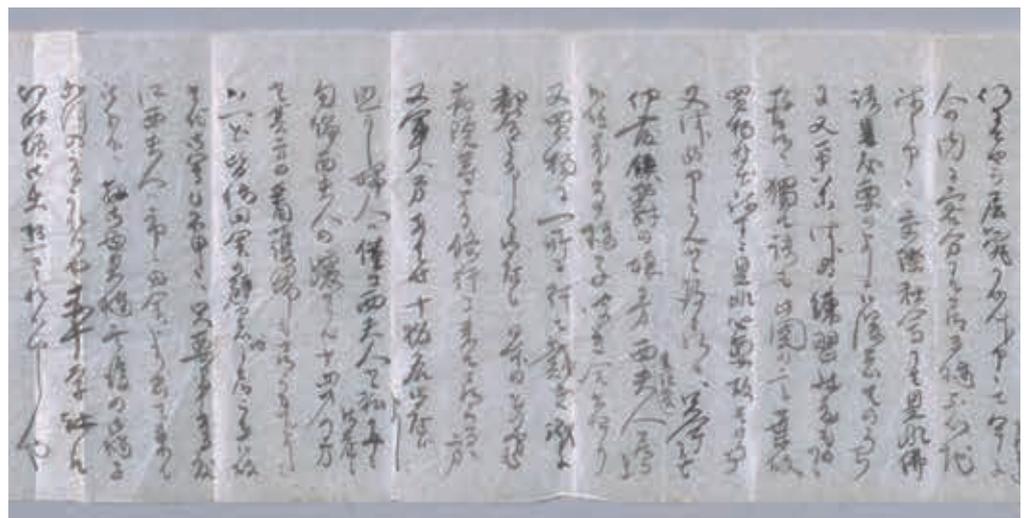


写真4 内田政書簡 土倉庄三郎・寿子宛 明治40（1907）年7月5日付 内田康哉・政関係文書23

内田康哉 (1865～1936)

慶応元 (1865) 年熊本生まれ。明治20 (1887) 年東京帝国大学法科大学卒、外務省に入省。第2次西園寺公望、原敬、高橋是清、加藤友三郎、斎藤実の各内閣で外務大臣を歴任し、辛亥革命、パリ講和会議、ワシントン会議など数々の難局に臨んだ。枢密顧問官、貴族院議員を経て昭和6 (1931) 年6月満鉄総裁、昭和11 (1936) 年死去。



<肖像写真の出典>

近代日本人の肖像より。

<http://www.ndl.go.jp/portrait/datas/503.html>

内田政 (1871～1946)

明治4 (1871) 年奈良生まれ (土倉庄三郎次女)。梅花女学校を経て明治22 (1889) 年同志社女学校本科卒業、卒業後もM. F. デントン (Mary Florence Denton) の指導により英語を学び、フィラデルフィアの語学学校を経てプリンマー大学卒。明治30 (1897) 年帰国。明治32 (1899) 年4月内田康哉と結婚、康哉の清国、澳、米、露などの駐割にも同行した。昭和21 (1946) 年死去。

黒沢博道関係文書

(6,100点 平成27年3月公開)

黒沢博道は民主社会党 (後に民社党) の結成初期に同党本部書記局員になり、党内で組織局長、教宣局局長などを歴任しています。

自由民主党と日本社会党を中心とするいわゆる55年体制の中で、日本社会党内の路線対立から、日本社会党右派の西尾末広派と河上丈太郎派の一部が、昭和34 (1959) 年に相次いで脱党して、翌35 (1960) 年1月に民主社会党が結成されました。同党は35年間の活動後、平成6年12月に、新進党へ合流して解党しています。

今回寄贈いただいた文書には、選挙に関する資料、たとえば同党選挙対策委員会の作成した小冊子や各種新聞、雑誌の特集記事、ピラなども、多く見受けられます。黒沢の自筆による「中期組織活動

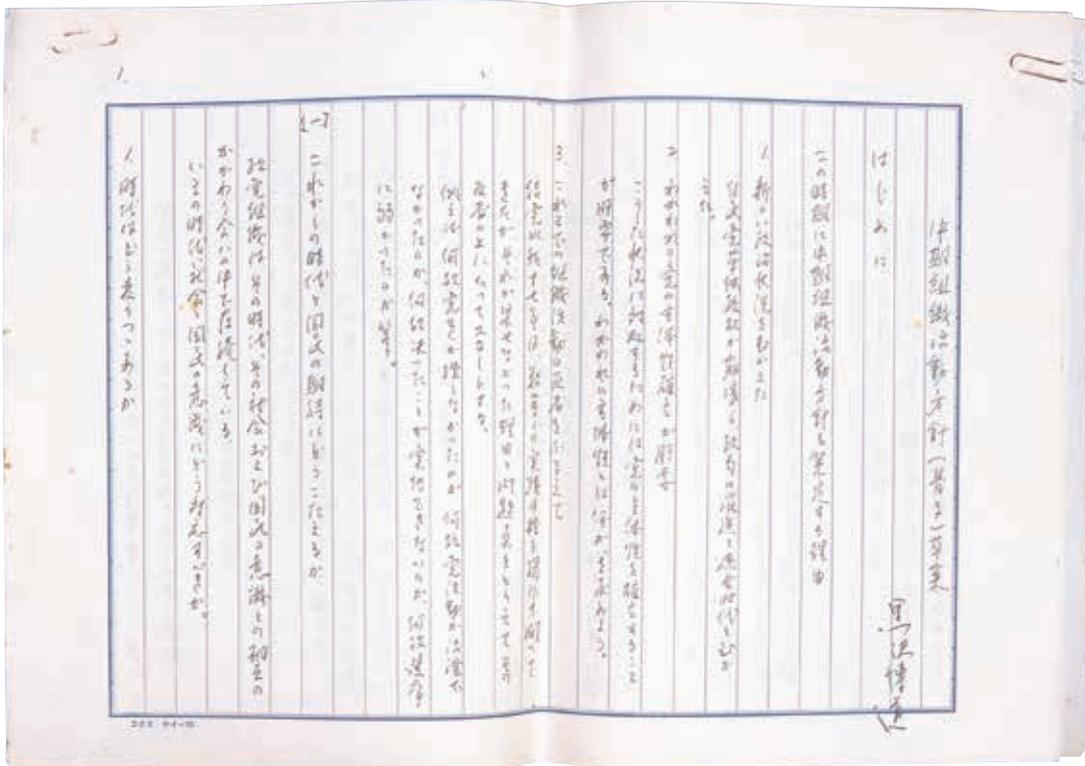


写真5 中期組織活動方針 (骨子) 草案 黒沢博道 黒沢博道関係文書1814 昭和52 (1977) 年初頭頃。

方針（骨子）草案」（写真5）は、昭和51（1976）年12月の第34回衆議院議員総選挙で自由民主党が単独過半数を割り込み（その後追加公認で過半数を確保）、連立政権が現実性を帯びてくる状況の中で、時代に適った党組織のあり方を提示したものです。このほかに、民社党の党務報告小冊子など、多岐にわたる資料が残されています。さらに全日本労働総同盟をはじめとする民社党の支援団体、友誼団体の印刷物や各政党についての新聞記事も含まれています。

黒沢博道（1935～）

昭和10（1935）年福島生まれ。昭和37（1962）年11月に民主社会党（後の民社党）本部書記局長、後に青年隊中央本部事務局長、組織局部長、教宣局部長などを歴任。昭和56（1981）年まで同党本部に勤め、その後、富士社会教育センター常任理事に就任。

渡辺千秋関係文書

（403点 平成26年10月公開）

渡辺千秋は長野出身の内務官僚、宮内官僚、政治家です。明治43（1910）年4月から大正3（1914）年4月にかけては宮内大臣を務めました。

「渡辺千秋関係文書」は昭和62（1987）年に当館に寄託されて以来、憲政資料室で公開されてきましたが、平成26年度にご遺族により当館に寄贈されました。その際に追加で寄贈された403点の資料を、このたび公開しました。

新たに公開した資料は、主に宮内省時代に千秋が受け取った政府高官などからの書簡と招待状です。書簡では、千秋の宮内大臣辞職にまつわる「雪冤（冤罪を晴らすこと）」の件について言及する元宮内大臣土方久元の書簡が多く、そのほかには明治天皇の大喪などに関連する大山巖や徳川家達^{いえさと}の書簡、また植物学者として知られる牧野富太郎の書簡などが含まれます。



写真6 招待状 渡辺千秋宛 明治43（1910）年4月30日 渡辺千秋関係文書 1148～1150
市野喜作（朝香宮附家令）による、朝香宮鳩彦王・允子内親王の婚礼祝賀会への招待状。左から晚餐会、夜会、園遊会の招待状。

書簡以上に点数が多いのが、晩餐会や祝賀会など各種社交行事の招待状です。宮内省時代のものを中心に全部で243通あります。招待状の保管状態は良く、場合によってはドレスコードや同日出席予定の賓客（皇族など）が記されたメモなども一緒に保管されています。また、封筒表には執事あるいは秘書と思われる人物により、千秋の出欠についてもメモが残されています。

写真6はいずれも朝香宮鳩彦王と允子内親王の婚礼を祝うために霞ヶ関離宮（現在の国会前庭附近）で催された宴の招待状です。本文が印刷された招待状に招待客名のみが墨書してあり、ドレスコードを記したメモも添付されています。3通あるのはそれぞれ、明治43（1910）年5月7日に催された晩餐会および夜会、そして翌日の園遊会の招待状であり、封筒表のメモ書きにより千秋がその全てに出席したことが分かります。このような宮家の婚礼に伴う祝賀会としては、他に竹田宮恒久王のものもあり、同様に晩

餐会・夜会・園遊会の3通の招待状が残っています。

なお、憲政資料室では、千秋の弟で明治期に3度にわたり大蔵大臣を務めた渡辺国武、息子（のちに国武の養子）で昭和初期に司法大臣を務めた渡辺千冬、孫でアジア開発銀行総裁を務めた渡辺武の関係文書も公開しています。

渡辺千秋（1843～1921）

天保14（1843）年長野生まれ。安政5（1858）年高島藩校長善館に学び、藩出仕。維新後は明治13（1880）年から明治23（1890）年まで鹿児島県令および鹿児島県知事を務めたのち、各県知事や内務次官などの要職を歴任。明治27（1894）年貴族院議員。宮内省内蔵頭を経て、宮内次官、明治43（1910）年宮内大臣、明治44（1911）年伯爵、大正10（1921）年死去。



<肖像写真の出典>

『グラフィック』2巻8号 有楽社 1910

国立国会図書館デジタルコレクションでご覧いただけます。

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2661422/7>

（利用者サービス部政治史料課）

憲政資料室のご案内（東京本館 本館4階）

幕末・維新时期から現代にいたる政治家・官僚・軍人などが所蔵していた文書類を集めた「憲政資料」、第二次世界大戦終了後の連合国による日本占領に関する米国の公文書を中心にマイクロフィルムで集めた「日本占領関係資料」、主に北米・南米への日本人移民に関する資料を集めた「日系移民関係資料」を扱っています。

憲政資料室の利用方法、今回紹介した資料を含む所蔵資料の概要等についてはリサーチ・ナビ「憲政資料室の所蔵資料」(<https://navi.ndl.go.jp/kensei>)をご覧ください。



憲政資料室



リサーチ・ナビ「憲政資料室の所蔵資料」

憲政資料収集活動の点描

1980年代後半～90年代を中心に

利用者サービス部司書監
堀内 寛雄



憲政資料室 書庫



憲政資料収集に関わりの深い研究者の方々とロンドンにて。
左から、大山礼子駒沢大学教授（元当館政治史料課主査）、
奈良岡聡智京都大学法科大学院教授、筆者、武田知己大東
文化大学教授、小林道彦北九州市立大学教授。

はじめに

憲政資料室所蔵の「憲政資料」は、近現代の日本政治史に関わりの深い人物が所蔵していた、いわゆる「個人文書」である。手紙・日記・メモ・執務資料あるいは写真等、その形態は多岐にわたる。特に中央の議会政治に関わりのあった、政治家、官僚、外交官、軍人等の所蔵していた文書類を中心に、寄贈・寄託・購入等の方法により収集を進めてきた。現在資料群の数は約500、総資料点数は約35万点以上に及んでいる。

本稿ではこれまでの「憲政資料」の収集活動のうち、主に昭和戦前期・戦後期資料の収集が活性化した1980年代後半から90年代の時期を中心に回顧することとした。

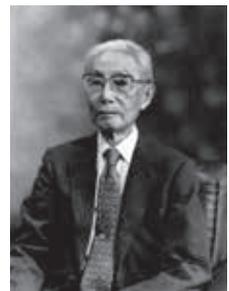
<初期の収集（1950年代初期まで）>

まず本題に入る前に憲政資料室創設以来の収集活動について簡単に触れてみたい。憲政資料室は、戦前に衆議院と貴族院が着手した、帝国憲法制定50年を記念する憲政史編纂事業の一環としての資料収集事業を引き継ぎ、1949（昭和24）年に、国立国会図書館国会分館の中に開設された。戦後の社会的混乱の中で、貴重な文書類が散逸の危機にあったが、憲政資料室の生みの親である大久保利謙^{としあき}氏の尽力により、主に明治維新の功労者、元勳、政治家らの旧蔵していた重要な資料を多く収集した。

大久保利謙（1900～1995）

歴史学者。1949年、国立国会図書館憲政史料編纂事務嘱託、その後非常勤調査員・客員調査員として1990年まで勤務。

<肖像写真の出典>『明治維新の政治過程』（大久保利謙歴史著作集 第1巻）
口絵（吉川弘文館 1986）



開室後3年余の間に収集されたのは、伊藤博文、岩倉具視、勝海舟、牧野伸顕、広沢真臣、三条家、大木喬任、桂太郎、陸奥宗光、井上馨、三島通庸、樺山資紀等の旧蔵文書等、現在でも憲政資料室のコレクションの中核をなす総計5万点近くの資料である。

<収集対象の拡大（1970年代まで）>

1961（昭和36）年に国立国会図書館が主催した「議会議開70年記念議会政治展示会」における資料調査を契機として、この時期の資料収集が活性化した。また同年、より広範囲な政治史料の収集・整備を目的に全館的な組織として「政治史料調査事務局」が設置され、以後、収集対象は、明治期中心の資料に限らず、大正・昭和期の資料まで拡大していくこととなった。

60年代から70年代にかけて、大山巖等の明治の元勲の文書が憲政資料室へ寄託され、品川弥二郎、都筑馨六、平田東助等の文書も購入、寄贈により収集された。また、寺内正毅、齋藤実、宇垣一成、石原莞爾等の軍人や、河野広中、星亨、小川平吉、安藤正純、浅沼稻次郎等の政党政治家、および阪谷芳郎、関屋貞三郎、松本学等の官僚の文書類、また日本国憲法制定に関わった法制局の入江俊郎、佐藤達夫の両文書などがこの時期に収集されている。

<昭和期資料の増加（1980年代以降）>

1980年代から90年代半ばにかけては、特に昭和期を中心とした資料の収集が目立つようになる。

以下では、筆者が政治史料課（憲政資料室）に在籍していた時期（1988年4月～1997年6月）を中心に、自身が資料収集・整理作業に携わった中から特に印象に残る資料とエピソードを紹介する。

主に戦前期の資料

○柏原兵太郎関係文書（寄託）

（かかわばら ひょうたろう 1896～1952 鉄道官僚 原資料2,653点 1988年搬入）

柏原は、鉄道省出身の官僚であり、戦時中は、企画院で各種物資動員計画を立案・実行した。それらを主とする資料が、古川隆久氏（現日本大学教授）が作成したリストと共に、別の研究者の自宅マンションに保管されていた。研究者の自宅は高層階だったが、資料受け取り当日、エレベーターが修理中で、資料搬出には階段を往復することとなった。

○杉山元関係文書

（すぎやま げん 1880～1945 陸軍大臣・参謀総長 原資料275点 1989年搬入）

主に杉山の若い時期の資料（戦術ノート、操典・教範類）が、杉山の縁戚にあたるお宅の土蔵に保管されていた。土蔵を壊すにあたり、必要な資料を選んで当館へ搬入することとなった。資料の保管状態は非常に悪く土もかぶっており、手でつかむとまだ明らかに土中の虫が生きているような状態であった。燻蒸設備が館内にないため、当時の資料保存対策室を通じて、上野の国立文化財研究所に燻蒸を依頼し、殺虫処置をした。

○安達峰一郎関係文書

（あだち みねいちろう 1869～1934 外交官・常設国際司法裁判所所長 原資料6,747点 1992年搬入）

四谷にあった安達峰一郎記念館敷地内の物置の奥に収納されていた数十箱の資料を、次々と引っ張りだして開封し、必要な資料を順次選別したうえで、車で当館へ搬入した。一連の作業には、担当課員のみでは手が足りず、ほかの部署からも要員を出してもらい、資

料搬出後は、不用な資料を元どおりに戻し清掃までした。資料には、フランス語の外交関係資料も多く含まれ、公開までには相当の期間を要した。

○林出賢次郎関係文書

(はやしで けんじろう 1882～1970 外交官・「満洲国」皇帝秘書官 原資料682点 1993年搬入)

林出は東亜同文書院(上海)卒の中国通の外交官で、和歌山県御坊市の林出家に、日記、「満洲国」関係資料などが残されていた。それらを調査のうえ寄贈いただくこととなったが、「厳秘会見録」(「満洲国」側高官と日本側高官の会見録)については、遺族の了解のもと、会見録の一部をすでに所蔵していた外務省外交史料館への寄贈となった。

伊藤隆氏による収集への協力

憲政資料室所蔵の昭和戦前期資料の中には、伊藤隆東京大学教授(当時)が、当館客員調査員在任(1990年～1995年)以前から収集の仲介に尽力され、公開された資料が多数あるが、その一部に触れる。

平沼騏一郎関係文書は、財団法人無窮会から譲渡された資料で、当時、当館委嘱研究員だった小林道彦氏(現北九州市立大学教授)に資料整理を依頼したが、筆者も共に整理にあたった。真崎甚三郎関係文書は、1990年に2回に分けて搬入した5千点を超える資料を、当時の担当者が総がかりで整理を行い、搬入後1年以内に公開した。文書の公開時には記者発表を行っている。荒木貞夫関係文書は、東京大学伊藤研究室に在籍していた若手の研究者グループにより、短期間で整理を進めたうえで、当館への寄贈となった。鶴見祐輔関係文書は、鶴見の長女である社会学者の鶴見和子氏(当時上智大学名誉教授)から寄贈を受けた。伊藤氏、

山口美代子氏(当時政治史料課主査)とともに練馬の鶴見氏宅を訪問したところ、2階に、大箱に詰められた相当量の資料が保管されていたが、階段は狭く急であり、手で持って降りるのが困難のため、仕方なく階段の上から次々と箱を下へすべり落とした。その後追加資料を数度にわたり搬入した。片倉^{ただし}表関係文書は、片倉の死後まもなくその住居を取り壊すことになり、伊藤氏とともに残されていた資料を搬出した。現場には、解体業者のほか、旧蔵図書を搬出するグループも来ており、混乱の中での作業であった。



片倉表関係文書(關東軍職員表 昭和7年3月 文書番号725)

斎藤実関係文書の再整理

また新規の収集資料ではないが、1991年から目録を再整備したものに斎藤実関係文書(その1)がある。(さいとう まこと 1858～1936 海軍大臣・首相・内大臣 原資料約10,000点 1964年搬入)

斎藤文書は1万点を超える膨大な量の資料群であるが、長らく、書類の部の一部を収録した謄写版の目録(『斎藤実関係文書目録(稿)』1967)と、他の書類、書簡を収録した複数冊にわたる簡易な手書きの目録が検索手段となっており、その複雑な体系は、利用に不便をきたしていた。そこで、まず書類の部から再整理に着手し、小林和幸氏(当時非常勤調査員、現青山学

院大学教授)の協力を得て、海軍・朝鮮総督府関係資料を中心とする詳細な目録を刊行した(『斎藤実関係文書目録 書類の部 一』1993)。

さらに残りの書類を収録した目録刊行(『同 書類の部 二』1995)に引き続き、書簡の部の目録作成と斎藤文書全体のマイクロフィルム化を進めた。これは当時早稲田大学教授であった由井正臣氏の尽力もあり、同大学との共同プロジェクトとして行われた。由井氏は元当館職員で、憲政資料室在職中に当時の水沢市に保管されていた斎藤文書の収集・整理を担当、前述の『斎藤実関係文書目録(稿)』を作成した縁があった。

書簡の部の目録2冊(『斎藤実関係文書目録 書翰の部 一』1998『同 書翰の部 二』1999)の編さん作業は、岡本公一、外村大、宮本正明の三氏に当館委嘱研究員として担当いただいた。足かけ9年に及んだ全4冊の目録刊行作業、文書全体のマイクロフィルム化により、斎藤文書の利用は格段に多くなった。

主に戦後期の資料

○芦田均関係文書(寄託)

(あしだ ひとし 1887~1959 外交官・首相 原資料2,691点 1993年搬入)

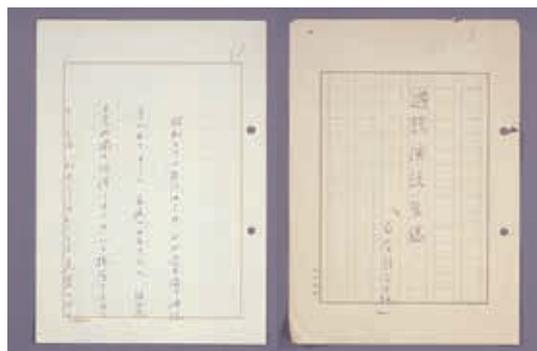
芦田均の外孫の下河辺元春氏より寄託を受けた。すでに刊行されていた日記の原本をはじめ、原稿、書簡等、戦後占領期の首相経験者の資料として重要であり、議会政治関係の展示会での活用も多い。

○石橋湛山関係文書(その1)

(いしばし たんざん 1884~1973 東洋経済新報社社長・首相 原資料1,481点 1985、93年搬入)

石橋湛山の長男で石橋湛山記念財団理事長(当時)の石橋湛一氏より寄贈を受けた。憲政資料室所管資料

の中では、幣原喜重郎、芦田均につぐ戦後の首相経験者の関係文書ということもあり、公開に合わせて記者発表を行った。後に伊藤隆氏より『石橋湛山日記』刊行に使用した日記原本のコピーが寄贈され文書に加わった。



石橋湛山関係文書(その1)(遊説演説原稿 昭和32年1月 文書番号563)

○有光次郎関係文書

(ありみつ じろう 1903~1995 文部官僚・日本芸術院長 原資料3,374点 1989年搬入)

文部官僚として次官まで歴任し、退任後は各種の審議会に関わった有光次郎氏本人から寄贈を受けた。自宅に膨大な量の資料が残されており、その大半は戦後の文教関係を主とする各種審議会配布資料で、ファイルに綴じてあるものと、封筒に入っているものが混在していた。資料は審議会別に分類しその中を時系列に並べて整理を行った。



有光次郎関係文書

○日本社会党国民運動局旧蔵資料

(にほんしゃかいとうこくみんうんどうきょく 原資料1,818点
1993年搬入)

当時の社会党関係者から当館の調査及び立法考査局を通じて資料寄贈の話があり、社会党本部の屋上にあった倉庫から大量の資料を当館へ搬入した。資料の保管状態は良いとはいえず、書庫内でまず主題によって大分け作業を行った。最終的には複数の資料を主題別に文書箱（計198箱）に収納する形で保管することとした。分量が多かったこと、当方担当者の交替、さらに旧蔵者である社会党が社会民主党となるなどの事情により、公開までには相当の期間を要した。内容的には1950年代から80年代にかけての労働運動・市民運動に関連した資料が主であり、それまでの憲政資料とは傾向の異なる資料である。ほかに中村光男氏旧蔵反戦学生同盟関係資料も、60年安保闘争前後の学生運動関係の資料として異色である。



日本社会党国民運動局旧蔵資料

議会100年展と資料収集

1990年には、議会開設100年を記念し、国立国会図書館主催で「議会開設100年記念議会政治展示会」を開催したが、これに合わせて、まだ埋もれている資料に関する情報の提供を、マスコミ等の媒体を使って広く呼びかけた。この成果として収集された資料として龍野周一郎関係文書（寄託を経て後に寄贈）がある。



龍野周一郎関係文書（三大事件建白之際 於東京撮影
明治20年11月 文書番号346）

当時政治史料課主査だった広瀬順皓氏（後に駿河台大学教授）と逗子にあった龍野家を訪問し、同家の離れに保管されていた資料を拝見した。外は雪模様の天候の中、明治20年代に自由黨員として各地を遊説した時期の日記等の貴重な資料の「発見」に時間が過ぎるのを忘れた。

ほかに下村宏関係文書、甘粕正彦関係文書等を、議会100年展を契機に収集した。

2000年代以降最近の収集

2005年から、伊藤隆氏が中心となり収集し、政策研究大学院大学で整理・保管されていた昭和戦前・戦後期の大量の資料の当館への搬入が進み、憲政資料室で順次公開している。扇一登関係文書、羽生三七関係文書、木内信胤関係文書をはじめ、戦後の防衛官僚の資料として海原治関係文書、宝珠山昇関係文書などもすでに公開されている。また伊藤氏の仲介により安田辰馬関係文書、和田耕作関係文書、加瀬俊一関係文書、阿南惟幾関係文書等も新たに収集・公開した。

ほかにもごく一例をあげれば、永田秀次郎・亮一関係文書（季武嘉也創価大学教授仲介）、満川亀太郎関係文書（スピルマン元九州産業大学教授仲介）、加波山事件関係資料（安在邦夫元早稲田大学教授仲介）、

谷干城関係文書（寄託、小林和幸青山学院大学教授仲介）、重光葵関係文書（寄託、武田知己大東文化大学教授仲介）、関嘉彦関係文書（奈良岡聰智京都大学法科大学院教授仲介）等を収集・公開するとともに、原資料からのマイクロフィルム撮影により、内田康哉関係文書（MF）（小林道彦北九州市立大学教授仲介）、満鉄社員名簿類（MF）等を収集した。

おわりに

明治期から戦前期にかけての資料については、その旧蔵者が戦前に「華族」の地位にあった人物も多く、その関係団体として現存する「霞会館」「尚友倶楽部」などの機関には、関係者からの資料寄贈に関して多大なるご協力をいただいていた。

これらのネットワークを通じて、過去に受け入れた資料の追加情報や、家の代替わりに伴う資料寄贈の希望が寄せられることも多く、さらに過去の寄贈者から他家へ憲政資料室を紹介していただくこともある。

また、これまで述べてきたように、憲政資料の収集にあたっては、研究者等の仲介はかかせず、そのネットワークは収集活動の大きなベースとなっている。

さらに近年では、若手の研究者とも関係を深めており、各種研究会での資料調査をふまえた上で、資料の寄贈を受けるケースも増えている。

これまでの筆者の経験からすると、資料の収集には長期的なスパンを必要とすることが多い。そのためにも研究者等とのネットワークを維持し、拡充していくことが、これまで以上に重要であることは言うまでもない。

・本稿は利用者サービス部政治史料課鈴木宏宗課長補佐、葦名ふみ憲政資料係長の筆者への2度にわたる聞き取りをもとに、筆者が再構成したものである。

収集資料の情報発信・展示会

新たに収集・公開した資料は、当館ホームページのリサーチ・ナビに個々の資料群の概要を掲載（一部PDF目録を公開）し、特に主だった資料は『国立国会図書館月報』で資料写真を含めて紹介するなどしている。さらに各種電子展示会（「日本国憲法の誕生」（監修：高見勝利当館専門調査員（当時））「史料にみる日本の近代」（監修：佐々木隆当館客員調査員（当時）、英文監修：ジョージ・アキタハワイ大学名誉教授）への掲載のほか、議会開設110年、120年の記念展示会および通常の当館主催企画展示会に出陳するなどの活用を行っている。



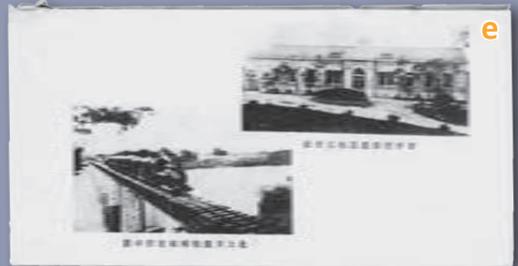
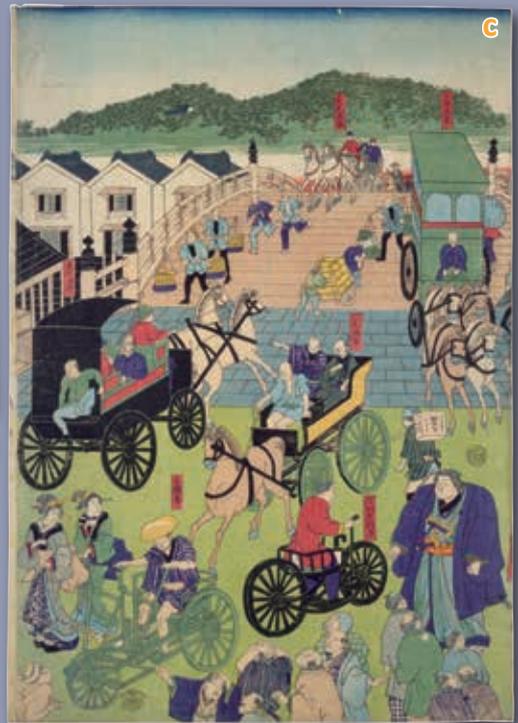
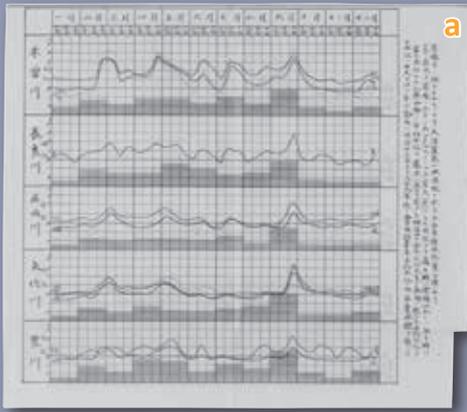
史料にみる日本の近代 <http://www.ndl.go.jp/modern/>
日本国憲法の誕生 <http://www.ndl.go.jp/constitution/>



上段左から筆者、黒沢文貴氏（東京女子大学教授・軍事史学会会長）、季武嘉也氏（創価大学教授、当館客員調査員）、小林和幸氏（青山学院大学教授、元当館非常勤調査員）。下段左から、広瀬順皓氏（元当館主任司書、駿河台大学名誉教授）内藤好以氏（尚友倶楽部調査室嘱託）、ジョージ・アキタ氏（ハワイ大学名誉教授）、上田和子氏（尚友倶楽部調査室）、伊藤隆氏（東京大学名誉教授、元当館客員調査員）。

○参考資料

大久保利謙『日本近代史学事始め』岩波書店 1996
伊藤隆『歴史と私』中央公論新社 2015
二宮三郎「政治史料調査事務局沿革」『参考書誌研究』(37) 1990.3
二宮三郎「憲政資料室前史」上・中・下『参考書誌研究』(43～45) 1993.9、1994.8、1995.10
堀内寛雄「憲政資料収集業務の継承」『図書館雑誌』102(7) 2008.7
『近現代日本人物史料情報辞典』全4巻 伊藤隆、季武嘉也編 吉川弘文館 2004-2011



デジタルコレクションから 
 歴史・文化を掘り起こそう
 ～ NDL データ活用ワークショップ報告～



平成 27 年 8 月 8 日、国立国会図書館 (NDL) が提供するデータの利活用の促進を目的として、東京本館において「NDL データ利活用ワークショップ～「国立国会図書館デジタルコレクション」のお宝資料 248 万点から地域の歴史・文化を掘り起こそう～」を開催しました¹。本稿では、当日の様子から、あるグループのワークショップの作業を例に、国立国会図書館デジタルコレクション（以下、デジタルコレクション）を使ってどのように資料を探したか、またそこで実際に見つかったデジタル化資料を紹介します。

○NDL データ利活用ワークショップ

イベントは、参加者に必要な知識をインプットする短めの講演と参加者によるワークショップの 2 部構成で行いました。当日は、会社員やエンジニア、学生、図書館員など幅広い層から、35 名の参加がありました。

後半のワークショップでは、参加者がテーマごとに 5～6 人のグループに分かれ、主に地域に関する歴史や文化の情報を、インターネット上の百科事典「ウィキペディア」の項目として編集する想定で²、デジタルコレクションから編集に役立つ資料を探し出す作業を行いました。「岩手の軽便鉄道」「神奈川の二宮尊徳」といった特定地域のテーマのほか、「古写真」「街道」といった広いテーマのグループも作られました。およそ 1 時間半のグループ作業では、各テーブルに設置されたノートパソコンを使って資料を探しながら、グループ内で活発な議論や意見交換が行われました³。

ここでは、明治時代の迎賓施設「延遼館^{えんりょうかん}」について調べた、あるグループの調査の様子と見つかったデジタル化資料を紹介します⁴。



左ページの資料は今回のワークショップで実際に見つかった資料です。

a 「各川旬別平均水位（明治 45 年大正元年）」愛知県測候所編『愛知県河川水量年報 明治 45・大正元年』愛知県測候所（大正 2 年）（pid/984427/10）
b 高橋省三編『二宮金次郎』学齢館（明治 27 年）（pid/1169770/1） c 錦朝楼芳虎、孟斎芳虎『東京日本橋風景』（明治 3 年）（pid/1312576/3） d 「濱、延遼館家具」コンドル博士記念表彰会編『コンドル博士遺作集』コンドル博士記念表彰会（昭和 7 年）[国立国会図書館／図書館送信参加館内公開]（pid/1688922/47） e 「北上川鉄橋列車進行の図」植田啓次著『岩手軽便鉄道案内』成文社（大正 4 年）（pid/948243/7） f 「武蔵 調布の玉川」瀬川光行編『日本之名勝』史伝編纂所（明治 33 年）（pid/762809/52）



この記事では、デジタルコレクション収録資料の ID を (pid/1234567/89) という形式で表しています。以下のように URL を直接入力すれば、画像に直接アクセスできます。

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1234567/89>

[国立国会図書館／図書館送信参加館内公開]と書いてある資料は、国立国会図書館内、または図書館向けデジタル化資料送信サービス加入館でご覧いただけます。

国立国会図書館デジタルコレクション

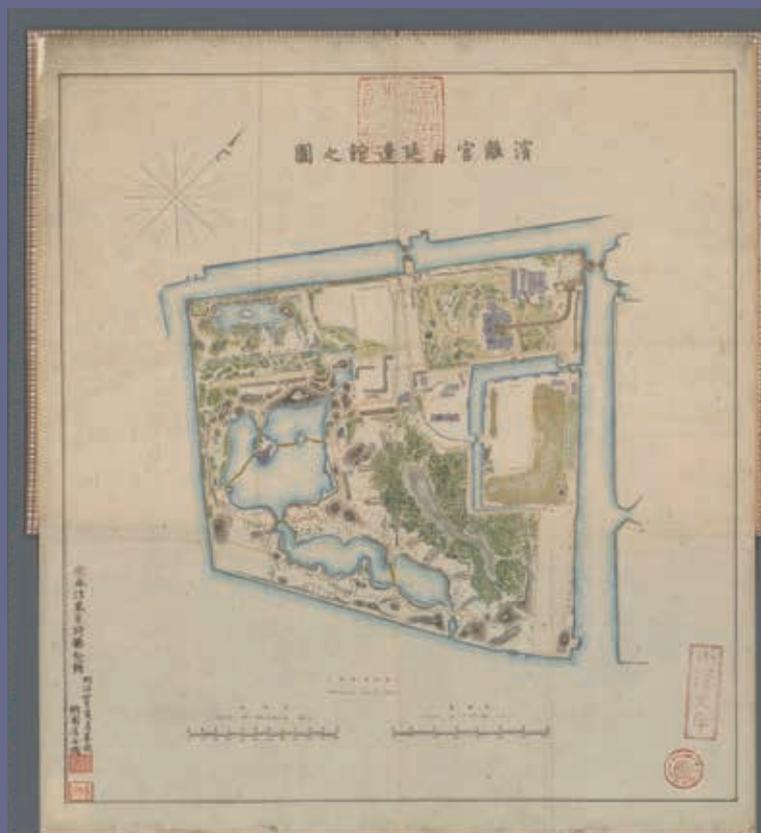


「延遼館」についての調査

「延遼館」は、19世紀後半、東京の浜離宮にあった近代日本初の迎賓施設です。明治23(1890)年に老朽化で解体されましたが、今年1月に、東京都が2020年の東京オリンピックに向けて復元する計画を発表し、オリンピック関連の話題として注目を集めました。

○まずはキーワード「延遼館」で検索

まず最初に「延遼館」というキーワードでデジタルコレクションを検索しました。すると、約30件のデジタル化資料がヒットし、その中から、浜離宮の北側の一角に延遼館の建物があったことを示す地図が見つかりました。また、ヒットした資料の中に相撲関係の資料が散見されたため、中身を確認すると、延遼館の中で明治天皇の天覧相撲が催されたことも分かりました。



『浜離宮并延遼館之図』酔園居士写(明治20年)
(pid/9369199/2)

地図では右上にあたる、浜離宮の入口近くに延遼館があったことが分かります。地図からは、延遼館を訪れた人が楽しんだであろう日本庭園の様子も想像できます。



酒井忠正著『日本相撲史・中巻(明治・大正篇)』
日本相撲協会(1964年)(pid/1692169/9)

[国立国会図書館/図書館送信参加館内公開]

明治17年の天覧相撲を描いた香蝶楼(歌川)豊宣の鮮やかな錦絵です。土俵場は、故実により、水引幕、四本柱を紅白の絹で巻かれていたという説明が付されています。

○視野を広げてさらに検索

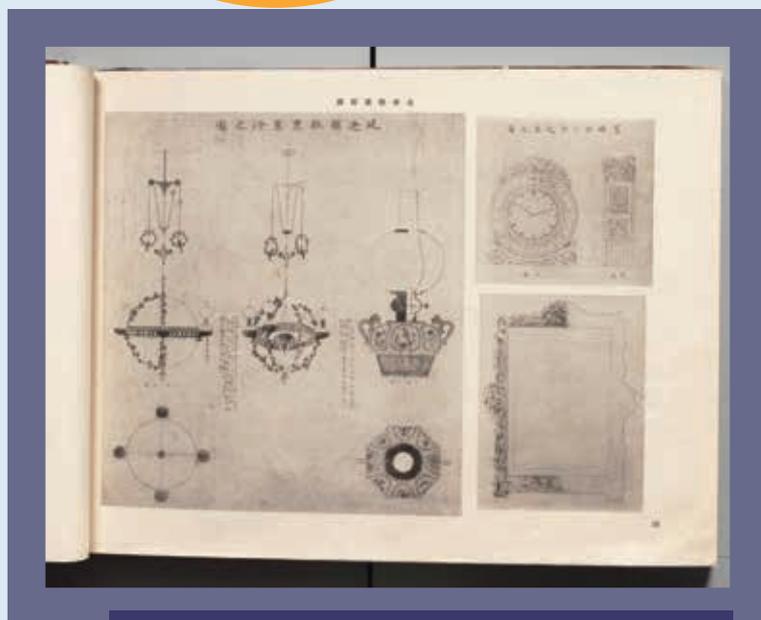
ここで、グループの中から「ヒットした30件だけを見ても多様な観点からの調査は難しい」との意見が出たため、あらためて調査の進め方について話し合いました。いったん視野を広げるためにインターネットのサーチエンジンを検索してみると、「延遼館の時代」というパネル展示が、東京都公文書館主催で今年5月に開催されていたことが分かりました。このパネル展示のチラシを見てみると、延遼館に関して、歴史、建物、施設、関連人物、イベントなどの観点でも調査できそうだと気づきました。これらの観点を整理するために、マッピング図(右)を作成しました。



○ふたたびデジタルコレクションへ

次に、延遼館が外務省の管轄であったことから、国立公文書館のデジタルアーカイブを検索しました。キーワード「延遼館」で、太政官の行政文書が多数ヒットしました。本文まで閲覧できるものは限られているものの、それらの文書から、延遼館が外国賓客の重要な接待の場となっていたことが推測できました。また、「コンドル博士」「合衆国前大統領グランド氏」といった具体的な人名が散見されたため、メンバーから「関連人物からも色々な調査ができそうだ」との声があがりました。

ここで改めてデジタルコレクションに戻ると、ヒットした資料の中に『コンドル博士遺作集』があり、その中にコンドルの手による延遼館の家具什器の意匠が掲載されていることに改めて気づきました。



コンドル博士記念表彰会編『コンドル博士遺作集』(昭和7年) (pid/1688922/45)

[国立国会図書館／図書館送信参加館内公開]

鹿鳴館を設計したイギリス人建築家ジョサイア・コンドルによる、延遼館の家具什器のデザインです。「陶器の色は青地にして紅青の筋を以って装飾」などの細かな指示が出されています。

さらに、前述の「延遼館の時代」展示チラシに、第18代米大統領グラントが延遼館に滞在し明治天皇と会見したとの記述があったため、グラントと明治天皇に関する資料がデジタルコレクションに含まれていないかを調べることにしました。すると『グラント将軍との御対話筆記』がヒットし、中身を確認すると、「御対話の図」と「浜離宮の図」が載っていました。「御対話の図」の建物の趣から会見の場は延遼館なのではないかとグループの中で盛り上がりましたが、本文をよく読むと、浜離宮内の別の建物だと分かりました。

このグループの調査はこの時点で時間切れとなり終了しましたが、メンバーは、延遼館に関する調査はさらに深められそうだと感触を得ていました。



おわりに

ワークショップの最後に、各グループが調査の成果発表を行い、ほかのグループが発掘したデジタル化資料に会場から驚きの声があがるなど、デジタル化資料の調査という知的探究を共有し、楽しむ雰囲気が参加者の間に生まれていました。参加者からは、様々な個性を持つ人と人がつながってアーカイブの魅力が増すことが分かった、探すのは大変だったが一人ではなくグループでできたことで色々な知恵やキーワードのアイデアが出てきて面白かった、といった感想が寄せられました。

今回のイベントを通じて、デジタルコレクションの奥深さや利活用の可能性を実感した参加者が目立ちました。今後も、国立国会図書館では、デジタルコレクションをはじめ各種データの利活用を進めていきたいと考えています。

(電子情報部電子情報流通課)



明治天皇著 [他] 『グラント将軍との御対話筆記』 国民精神文化研究所 (1937年) (pid/1157603/7)

アメリカ南北戦争の英雄であるグラント第18代大統領は、明治12(1879)年に訪日し、延遼館に滞りました。なお、この絵の会見の場は、浜離宮の中にある「中島の茶屋」でした。



- 1 このイベントは、地域課題の解決に向けた公共データの利活用コンテスト「アーバンデータチャレンジ2015」の開催に合わせて行ったものです。NDLは2015年度から、データ提供・支援拠点としてこのコンテストに参加しています。
- 2 このようなワークショップはウィキペディアタウンと呼ばれ、現在オープンガバメントやオープンデータの流れの中で、市民が地域を知るイベントとして全国各地で開催されています。
- 3 ホームページに、当日の資料や全グループの調査の結果を掲載しています。
<http://www.ndl.go.jp/jp/event/events/20150808dataaws.html>
- 4 当該グループのメンバーの一人であった東京都立多摩図書館職員の方が作成した、グループ調査結果のまとめ資料を参考に執筆しました。



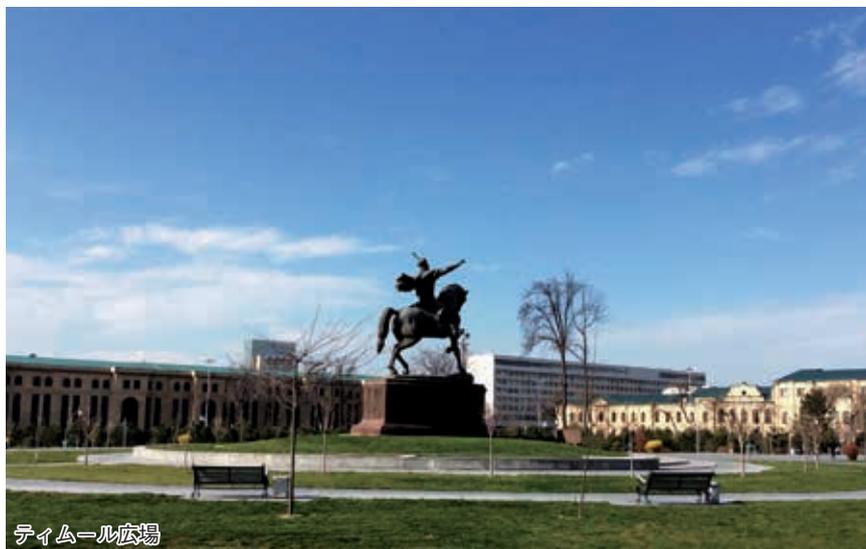
ウズベキスタン国立図書館の古典籍資料



シャルク書店



国立子ども図書館



ティムール広場



チヨルスー・バザール

世界図書館紀行

タシケント（ウズベキスタン）

山本 直樹



モスクと筆者

国立国会図書館国際子ども図書館は「子どもの本は世界をつなぎ、未来を拓く！」をモットーに、世界140以上の国と地域の児童書を所蔵している。しかし、欧米に比べ、東アジアを除くアジア・アフリカ地域の児童書の所蔵は、少ないと言わざるをえない。これは、選書に必要な、児童書に関する情報が不足していることも関係している。ここでは、筆者が児童書の出版事情の調査のために赴いた中央アジアのウズベキスタンで訪れた図書館のうち3つを紹介する。

ウズベキスタンの首都 タシケントへ

中央アジアといえば一般的に、旧ソ連に属していた5か国（カザフスタン、トルクメニスタン、ウズベキスタン、キルギス、タジキスタン）を指す。ウズベキスタンの人口は約3,000万人で、中央アジア諸国の中で最も多い。シルクロードの中継地点として長い歴史を持ち、特に、世界遺産に指定されているサマルカンドや、ブハラ、ヒヴァなどの都市の美しい街並みが有名である。

首都タシケントは人口214万人の都市であり、新市街と旧市街とに大きく分かれる。市内には地下鉄やトラム、路線バスが走っており、交通網が発達している。ただしタクシーはいわゆる白タクが多く、運賃も事前交渉制である。旅行者には一般車とタクシーとを見分けるのが難しい。

新市街の中心部にあるティムール広場には、14世紀から15世紀にかけて隆盛を誇ったティムール朝の創始者であり、民族の英雄とされるアミール・ティムール（1336-1405）の銅像が建つ。ここは旧ソ連時代には革命広場と呼ばれ、レーニン像が建っていたとのことである。この広場から、整然とした並木道が放射状に伸びている（写真1）。

この並木道で写真を撮っていると、突然、警官に呼び止められて画像データを消すよう言われてしまった。近くに政府関係の施設が

あったようだ。このほか、地下鉄の駅構内など、撮影不可の場所が多い。この記事内でも、建物の外観が撮影できなかったケースがあるが、ご容赦いただきたい。

戦後、旧ソ連によって抑留された日本人が建設に貢献したといわれるナヴォイ劇場（写真2）は、児童書調査のために訪れたシャルク書店（写真3）のすぐ近くにあった。1966年のタシケント地震で市内の多くの建物に甚大な被害が出た中でも、倒壊することなく現在まで使用されている建物であり、日本とウズベキスタンの友好のシンボルともなっている。また、市の郊外には、日本人抑留者の墓地があり、現在でも現地の住民によって整備されているという。

旧市街は市内西部に広がっている。チョルスー・バザール（写真4）は幅広い生活物資が扱われる巨大なマーケットであり、活気に満ちている。モスクや神学校（マドラサ）も点在している。

訪問した3月中旬はちょうど、街路樹のあんずの花が咲く時期であり、なおかつ中央アジアやイラン系のイスラム教徒にとっての一年の始まりである、春分を祝うナウルーズ（Navro'z）の時期でもあった。街のところどころにスローガンや飾り付けが施され、華やかな伝統衣装を身にまとった人もちらほら見られた。

筆者はホテルで1万円札を両替したとこ





ろ、公式レートでも約20万スムとなり、大量の1,000スム札を渡された（写真5）。インフレが進んでいるだけでなく、高額紙幣が出回っていないため、人々は札束を持ち歩くのが日常化している（クレジットカードが使える場所は少ない）。

レストランや屋台は市内の至る所にあり、ポロフ（ピラフ）、ラグマン（麺料理）などのウズベク料理を食べることができる（写真6）。イスラム教圏ではあるが、ビールやウォッカ、ワインといったアルコール飲料も豊富である。一方、チャイハナ（喫茶店）で広く飲まれているのは緑茶である。

ウズベク語の変遷

ウズベキスタンの公用語はウズベク語である。ウズベク語は、西はトルコ（トルコ語）やクリミア半島（タタール語）から、東は中国の新疆ウイグル自治区（ウイグル語）およびロシア極東のサハ共和国（サハ語）まで、広域に分布するテュルク諸語のひとつである。テュルク諸語には突厥文字やウイグル文字といった独自の文字があったが、イスラム教の受容にともない、アラビア文字が使用されるようになった。その後、ウズベク語に関しては、1930年代のジャディード運動と呼ばれる教育改革によりラテン文字表記が導入されるが、1940年代にソ連の影響が強くなると、今度はキリル文字による表記に変わった。そしてソ連崩壊以降はふたたび、ラテン文字が導入されている。国際子ども図書館所蔵のウズベク語児童書はキリル文字のものがほとんどであるが、タシケントの書店には、ラテン文字表記で書かれた新しい児童書が多数販売されていた（写真7）。児童書はものにもよるが1冊7,000スムから12,000スム程度である。



ウズベキスタン国立図書館

新市街のナヴォイ通りに位置する国立図書館は、旧ソ連時代以来、市内各所に分散していた施設を統合し、2012年に新しい建物となりリニューアル開館した(写真8,9)。正式名称には、ティムール朝時代に活躍した、中央アジアを代表する詩人アリシエル・ナヴォイ(1441-1501)の名称が付される。

入退館ゲート前の利用者登録カウンターの横には、託児スペース(写真10)が用意されており、乳幼児連れの利用者への便宜を図っている。現時点では子ども向けの閲覧室はな

く、図書館の利用者は成人が中心であるが、今後児童書の所蔵を拡充し、児童サービスにも取り組んでゆくとのことである。常設展示は専門のスタッフにより約2週間おきに入れ替えが行われ、訪問した際はイランの美術書が展示されていた。

ウズベキスタン国立図書館の最大の特徴として、各閲覧室が、主題別ではなく利用者層によって分けられている点あげられる。若者向け、研究者向け、ウズベキスタンについて知りたい人向け…、などといった各室には、広々とした閲覧席(写真11)だけでなく、小展示スペース(写真12)があり、参考図書



も充実している。同図書館のシステム構築には韓国による支援が行われたためか、韓国室もある。

幅広い年齢層の要望にこたえるため、資料検索の端末以外に、目録カードも健在であった。約700万冊の所蔵資料の多くは書庫にあり、資料の受取・返却カウンターは各フロアにある。利用者カードに書かれている番号によってカウンターが割り振られており、分散することで混雑の低減を図る仕組みだ。

古典籍も保存されており、アラビア文字で書かれた14世紀の文献(写真13)など、貴重な資料を多く所蔵している。貴重書庫は温湿度が管理されており、資料の劣化を防いでいる。資料保存部門では、ちょうどウズベキスタン国内の地方の図書館員向け研修が行われており、日本の和紙と澱粉糊を使った修復方法の実演が行われていた(写真14)。さらに別のフロアには、外国製の大型スキャナーが並んでおり(写真15)、所蔵資料のデジタル化も積極的に進めているとのことであった。

ウズベキスタン国立子ども図書館

ウズベキスタン国立子ども図書館(写真16)は新市街のグラモフ通りに位置する。建物の入口には「未来、幸福、自由、そして繁栄祖国！」という、スローガンが掲げられている(写真17)。

こじんまりとしたロシア風の外観の建物は、1907年に建設された。奇しくも国際子ども図書館レンガ棟として使用されている、旧帝国図書館とほぼ同じ時期の建物である。ここはもともと、地元有力者の邸宅であったが、旧ソ連時代に接収され、1965年に子ども図書館となった(写真18, 19, 20)。2015年でちょうど50周年を迎える。

館内には日本のODA(政府開発援助)に





19



20



21



22



23



24



25

よって導入された視聴覚設備やパソコンが並んでおり、イベントや各種活動に利用されている(写真21,22)。一般的な図書館サービスにとどまらず、学習用コンテンツをはじめとするウェブサイトの拡充や、子供向けイベントの開催にも力を入れている。今年(2015年)はウズベキスタンでは、大統領令により「高齢者を大切にす年」と定められたため、高齢者による昔話りのイベントなども計画しているとのことである。

所蔵資料数は約20万冊であり、閲覧室は、絵本や学習書が多く排架されている幼稚園～小学校低学年向けのエリアと、辞書や辞典類をはじめとする参考図書が並ぶ小学校高学年～中学生向けの学習スペースとに分けられる(写真23,24)。学習スペースでは、熱心に勉強に励む小中学生の姿が見られた(写真25)。

ウズベキスタン 日本人材開発センター図書館

新市街の中心・ティムール広場から地下鉄に乗ってティムール通りを北へ進み、バダムザル駅を降りたところに目立つ巨大な建物が、インターナショナルビジネスセンターである。その6階に、国際協力機構(JICA)と国際交流基金、およびウズベキスタン対外経済関係投資貿易省が共同で運営する、ウズベキスタン日本人材開発センターがある(写真26-30)。MBAに準じた実践的なビジネス支援教育や、日本語教室、日本文化の発信を行っている同センターの利用者は、年間延べ6万人と多く、日本への非常に高い関心がうかがえる。

同センターの図書室に入ると、日本関係資料の展示や子どもたちによる折り紙作品などが並べられている。児童書については、『ぐりとぐら』など、日本でも広く読まれている

ものが多数所蔵されている。現地の人々が利用する日本語資料で人気があるのは、ファッション雑誌やマンガとのことである。日本の企業などからの駐在員が帰国の際に寄贈していった文庫本や新書が多いものの、利用は少ないとのことで、文字よりもイラストや写真が多い本のほうが需要が高いようである。約1万点の蔵書には、日本語資料以外に、ロシア語やウズベク語の資料もある。

おわりに

タシケント市内には、ほかにも国立科学アカデミー図書館など、多くの専門図書館や公共図書館がある。

タシケントへは、成田空港からウズベキスタン航空による直行便が就航しており（2015年10月現在）、日本からの訪問は便利である。今後、両国間の人的交流はさらに盛んになることが期待されている。

今回の出張ではタシケントのみの訪問であったが、他の中央アジアの国や都市の状況も気になるところである。ヨーロッパとアジアを結ぶシルクロードの要衝として栄え、文明の交差点と呼ばれるこの地域の民話は、日本の民話・伝承類との共通性が一部で指摘されている。また、ウズベク語と類似点が多い兄弟言語であるウイグル語が使われる中国の新疆ウイグル自治区は、ここ数年で経済面、文化面でも大きく変化してきており、今後の動向が気になるところである。

なお、今回の出張では、在ウズベキスタン日本大使館の浅村卓生氏、訪問先の各図書館を案内して下さったスタッフの皆さんをはじめ、多くの方々のお世話になった。この場を借りて御礼申し上げる。

(やまもと なおき

国際子ども図書館資料情報課)





『出雲弁だんだんかるた』
山陰中央新報社（発売）[2006]
〈請求記号 YN11-J12〉

図書別室の資料から 第1回 かるた

国立国会図書館には、単行本などの「図書」、新聞や雑誌などの「逐次刊行物」のほかに、「非図書資料」と呼ぶ資料群があります。非図書資料の内容は1枚ものの地図、マイクロフィルム、CD-ROMなど多岐にわたるため、利用を請求するカウンターや資料室は資料によって異なり、それぞれの資料には特有の分類記号を付与して形態を識別できるような工夫をしています。

このコーナーでは、東京本館図書別室で利用できる非図書資料のうち、かるた、写真帳、絵葉書について、これから3回シリーズでご紹介していきます。



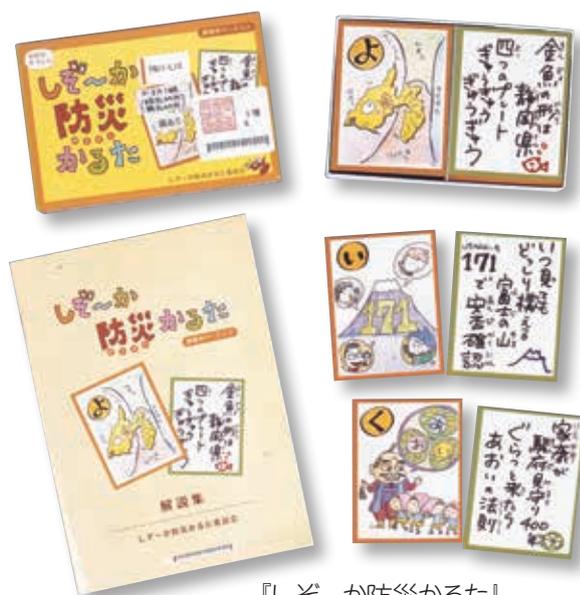
『サザエさんかるた 復刻版』
赤ちゃん和妈妈社 2012.11
〈請求記号 YN11-J27〉

かるたはポルトガル語の「carta」（カードの意）を語源とし、16世紀頃南蛮人の来航にともない伝来したのが日本での始まりと一説にいられています。かるたは、国立国会図書館ではカード式資料に分類され、NDL-OPACで検索できます。分類欄に分類記号「YN11」を入力すると、国立国会図書館で約90点のかるたを所蔵していることが確認できます。タイトル欄またはキーワード欄に検索語を入力して、探しているかるたが所蔵されているかを検索することもできます。児童用のかるた（分類記号は「YNZ11」）については、国際子ども図書館に所蔵があり、利用することができます。

故郷の歴史や文化を後世に伝える趣旨で作られるかるたが日本各地にあります。そのうちの一つ、『出雲弁だんだんかるた』は「方言かるた」で、読み札に100語以上の出雲弁が用いられています。出雲弁を知らなくても理解できるよう、「出雲弁 使ってごしなっただんだん だんだん（出雲弁を使ってもらって、ありがとう）」といったように、標準語の解説が読み札に併記されています。読み札、絵札各47枚、方言小辞典、出雲弁読み上げCDで構成されており、実際の出雲弁の発音を聞くことができます。ランダムに再生すると読み手がいなくても遊ぶことができ、誰でも気軽に出雲弁にふれあえる工夫がされています。全国的に方言が衰退しているとの指摘もあるなか、人々の間に温か味をもたらす方言を大切にしていきたいという想いが込められたかるたです。

地方自治体の政策などに関するキャンペー

ンの一環として作られるかるたもあります。『しぞーか防災かるた』は、東日本大震災後に、故郷の地質や自然、歴史を知った上で必要な防災知識を学ぶ防災学習ツールとして、静岡市民への公募や市民参加型ワークショップの開催により、市民が読み札を考案して作成されました。資料は読み札、絵札各44枚、解説集1冊、遊び方1枚で構成されています。小学生から80代までの市民約300人から集めた上の句、下の句を組み合わせる短歌にし、その中から44首を選定して完成しました。「家康が駿府見守り400年 ぐらっと来たら *あおいの法則」（*静岡市内の小学校で教えている、徳川家の家紋の葵にかけた「あわてない」「おさない」「いわない（しゃべらない）」という意味の災害時の避難の法則）といったように、全ての読み札が上の句で静岡の風土や歴史、名所を紹介し、下の句から防災の心得を学べるよう工夫して作成されて



『しぞーか防災かるた』
しぞーか防災かるた委員会 [2013]
<請求記号 YN11-L18>

います。地域の成り立ちを知った上でどんな防災意識が必要か、かるたを通じて学ぶことができます。

漫画やアニメのキャラクターをモチーフにしたかるたも多く作られています。『サザエさんかるた』は日本の国民的人気キャラクターであるサザエさんのかるたで、原作者の長谷川町子さんが描きおろした原画のかるたを約60年ぶりに復刻したものです。資料は読み札、絵札各44枚、特大原画ポスター、解説1枚で構成されています。「けいとだま ねこにおわれて えんのした」「つるしがき ひとつふたつと きえにけり」といった日本の風習や文化を表現したユーモアある読み札と、原版のかるたを忠実に再現した色鮮やかな絵札で、現在のアニメとはまた違ったレトロ感あるサザエさんを子どもから大人まで世代を超えて楽しめます。

おばけや妖怪を題材にしたおばけかるた（妖怪かるた）は、江戸時代後期から大正時代中頃にかけて流行したいろはかるたの一種です。『紀州おばけカルタ』は、和歌山県内で出現すると言い継がれてきた砂かけ婆や海坊主、蛇女などのおばけ71種が登場するかるたで、読み札、絵札各71枚、解説書1枚で構成されています。「べろっと舌だす ウミボウス やみよのうみに あらわれる」といったように、おばけの出現地や特性が読まれた読み札と、おばけの絵が描かれた絵札により、遊ぶうちにおばけの容姿や特性を覚えることができます。解説書には、和歌山県の地図上におばけの出現場所を示した紀州おばけ地図や、かるたに登場しない紀州おばけの名称一

『紀州おばけカルタ』
わかやま絵本の会 1987.7 <請求記号 YN11-4>



覧が掲載されています。多くの紀州おばけについて知ることのできる興味深いかるたです。

これらの資料は、東京本館図書別室で閲覧することができます。カード式で散逸しやすい資料のため、関西館への取寄せ、図書館間貸出しは行っていませんので、ご利用の際はNDL-OPACで事前に所蔵館をご確認のうえ、東京本館所蔵の場合は図書別室にお越しください。

今回取り上げたかるたはほんの一部で、当館の所蔵も多くはありませんが、それぞれのかるたを手にとれば、札1枚1枚に込められた制作者の想いがじかに伝わってきます。これらが時代を超えて多くの人々の心に伝わるよう永く保存していきます。1枚の読み札、絵札に凝縮された想いをあなたも実感してみませんか？

(利用者サービス部図書館資料整備課

松戸 沙耶佳)

本屋に ない本

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

トンボ鉛筆100年史 The 100 year history of Tombow Pencil

トンボ鉛筆100周年記念事業委員会 編・刊
2013.3 97p 30cm <請求記号 DH22-L71>

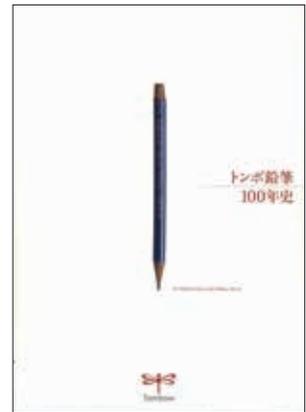
鉛筆の上部に刻印されているトンボのマーク、そのトンボの向きが最近変わったことに気付いた人はいるだろうか。鉛筆といわれたら、トンボではなくて三菱のマークを思い浮かべる人もいるだろうか。

本書は、2013年に創立100周年を迎えた株式会社トンボ鉛筆が「書く」から「消す」、「貼る」へとその事業領域を拡大してきた軌跡をまとめたものである。

トンボ鉛筆の前身である小川春之助商店は、教育令が制定され子供の学校教育が普及した東京で、文房具全般を扱う商店として1913年に開業した。春之助は、しだいに鉛筆の製造販売に軸足を移し、鉛筆の上に人形を付けた「Funny Face」、潜航艇のマークを刻印した「SUBMARINE」、チャップリンの短編映画の流行とあいまって流行したというステッキ型の「ステッキ鉛筆」などの、時代のトレンドを意匠に取り入れた銘柄鉛筆をヒットさせ、その後の成長の礎を築いた。本書に掲載された写真を見ると、製品のデザインや広告が多彩であり、既にこの時代の鉛筆に実用性だけでなく美的なセンスが求められていたことがうかがえる。

戦後は、次々と品質の向上を達成し、現在に続く鉛筆のブランド「MONO」や黄色い箱の「TOMBOW No.8900」を売り出したほか、ボールペンやマーケティングペンなどの生産にも取り組み、「書く」道具の可能性を広げていく。さらに、「消す」や「貼る」

の分野でも、「MONO 消しゴム」や修正テープ「MONOホワイトテープ」、スティックのり「ピット」シリーズなどヒット商品を生み出し、総合文具メーカーとしての立場を確固たるものとした。



本書の終章によると、2013年の創業100年を期に、これまで親しまれてきた下向きトンボに代わって、上向きのトンボが統一シンボルマークとして採用された。開発型メーカーとしてのトンボの、今後の無限の成長を求めて飛び立とうという思いが込められているという。

編年体で綴られた本文に加えて、ほぼすべてのページに商品の鮮やかなカラー写真が掲載されており、トンボ鉛筆の歴史が数々の商品の誕生と進化の歴史でもあることを伝えている。本書の読者の中には、懐かしい商品の写真を見つけたという方もいるだろう。筆者は、子供の頃、友達が持っていたスティックのりに驚いたことを思い出したが、今はテープのりというさらに新しい形ののりが出ているとあってさらに驚いた。

コラム記事やテーマ特集も充実しており、これまでの商品のデザインから販促用ポスターの変遷、主要商品年表まで楽しく眺めることができる一冊である。

(総務部会計課 うめざわ こうすけ 梅澤 孝助)

※電子ブックの閲覧可能
<http://www.tombow.com/100th/tombow100>

職員の「学び」を支えます

意外に思われるかもしれませんが、国立国会図書館の職員になるのに司書の資格は必要ありません。その代わりに、採用後に体系的な研修を通じて図書館の業務に必要な知識、スキルを習得します。私たち研修係は、この職員研修の企画・運営を担当しています。

入館した新人職員は、まず5日間の「新規採用職員研修」で館全体の概要を学んでから、各配属部署へと旅立ちます。そして、入館2年目・3年目には「職員基礎研修」を受講し、館の業務や外部機関との関わりについて、より深い知識を身につけていきます。入館したての初々しい新人さんたちが、翌年には配属先の部署にすっかりなじみ、少し成長した姿で再集合するのを見るのは嬉しいものです。その後も係長、課長補佐、管理職に昇進したときなど、段階に応じた研修を実施しています。これらをまとめて「階層別研修」といい、対象となった職員は職務を離れて研修に専念します。

とはいえ、研修期間中に日常業務から完全に離れることはなかなか難しく、研修生は両立に苦勞します。研修生の負担を少しでも軽くするため、一部の科目はTV中継を行い、研修のための出張を減らす工夫もしています。これまでは東京本館と関西館（京都府相楽郡精華町）の間だけであったTV中継に、今年の8月からは



上野の国際子ども図書館も加わり、3施設で同時に研修を受講できるようになりました。国際子ども図書館の研修生が、上野から永田町という近いようで微妙に遠い距離を移動しなくても済むようになったことは、運営側の私たちとしても嬉しい限りです。

中継時の映像選択や会場カメラの操作も研修係の仕事ですが、望ましい映像に切り替えるためには、集中力と反射神経が要求されます。また、突然スライドが映らなくなる、音声が届かないなど、トラブルが起こった場合に対処できるよう常に会場の隅で目を光らせており、研修当日は最後まで気を抜けません。

無事に研修が終わるとほっと一息、でもまだまだアンケートの集計が残っています。好評で喜んだり、厳しい意見にちょっと落ち込んだりしながら、早くも次回の企画を頭の中であれこれと練り始めるのでした。

（人事課研修係 歩くクマ）

重要文化財の指定

9月4日、国立国会図書館所蔵の「小野蘭山関係資料」が、文化財保護法（昭和25年法律第214号）第27条第1項の規定により重要文化財に指定され、同日付けで官報告示された（平成27年9月4日文科科学省告示第142号）。

小野蘭山（1729-1810）は、江戸時代の本草学の第一人者である。「小野蘭山関係資料」は、小野蘭山の自筆本のほか、谷文晁が描いた小野蘭山肖像画、木村蒹葭堂の入門誓紙等を含むもので、平成13年、子孫の小野強氏から当館に寄贈された資料の一部である。

お知らせ

■ 新刊案内

国立国会図書館の 編集・刊行物



外国の立法 立法情報・翻訳・解説 第265号 A4 176頁 季刊 1,800円(税別)
発売 日本図書館協会 (ISBN 978-4-87582-779-5)

<主要立法(翻訳・解説)>

イギリスの2015年対テロリズム及び安全保障法—「イスラム国」台頭で変わるテロリズム対策—

フランスの国民投票制度の改正—国会議員と有権者による共同発案—

ドイツにおけるカジノ規制—ゲームセンターとの比較の観点から—

中国における立法法の改正

ベトナム2014年公共投資法—公共投資をめぐる財政規律と効率化を図る新法の制定—

レファレンス 776号 A4 103頁 月刊 1,000円(税別) 発売 日本図書館協会



議員立法序説

貿易収支に見る産業構造の変化と政策

日本の行政機構改革—中央省庁再編の史的変遷とその文脈—

カナダの行政組織とその再編

カレントアウェアネス 325号 A4 24頁 季刊 400円(税別) 発売 日本図書館協会

神戸大学附属図書館「震災文庫」利用の現状と課題

国立図書館によるデジタル化資料の専門家育成：LCとBLの事例から

北米のメタデータ・ライブラリアンシップ事情

<動向レビュー>

近年の図書館史(単館史)編纂の傾向

米国デジタル公共図書館(DPLA)の過去・現在・未来

データジャーナル：研究データ管理の新たな試み



入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14 電話 03(3523)0812

CONTENTS

- 02 <Book of the month - from NDL collections>
Diary of Sadamu Shimomura, the last Minister of Army at the time of defeat in World War II: on this day last year and the year before last
- 04 Materials newly available in the Modern Japanese Political History Materials Room
- 10 Description of the acquisition activities of modern Japanese political history materials: focusing on the late 1980s and 1990s
- 16 Let's discover history and culture from the NDL Digital Collection: Report on the NDL Data Utilization Workshop
- 21 Travel writing on world libraries: Tashkent (Uzbekistan)
- 28 Materials from the Special Purpose Reading Room (1): *Karuta* or Japanese playing cards
- 31 <Books not commercially available>
○ *Tonbo enpitsu 100nenshi: The 100 year history of Tombow Pencil*
- 32 <Tidbits of information on NDL>
We support the learning activities of our staff
- 33 NDL NEWS
○ Designation of important cultural properties
- 34 <Announcements>
○ Book notice - Publications from NDL

国立国会図書館月報

平成 27 年 11 月号 (No.655)

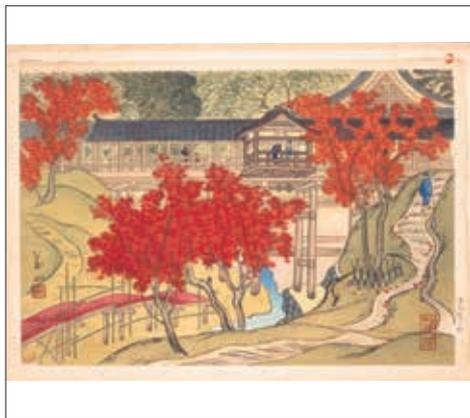
平成 27 年 11 月 1 日発行

発行所 国立国会図書館
編集者 小寺正一
責任者

印刷所 株式会社 正文社印刷所

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03 (3581) 2331 (代表)
FAX 03 (3597) 5617
E-mail geppo@ndl.go.jp

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌 517 号以降、PDF 版を当館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) > 刊行物 > 国立国会図書館月報でご覧いただけます。



「新選京都名所 三木翠山創作版画 第2集」から
「通天橋の秋」
三木翠山〔作〕 佐藤章太郎商店 編 佐藤章太郎商店
大正14（1925）年 1冊 44cm
「国立国会図書館デジタルコレクション」でご覧になれます
（モノクロ画像）
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1014915/12>

国立国会図書館月報

平成27年11月1日発行（毎月1回1日発行）
（11月号通巻665号）